

国語

1

出典

古東哲明『瞬間を生きる哲学 〈今ここ〉に佇む技法』(第一章 瞬間抹消——瞬間を忘れて生きるの
はなぜなのか 1 新しい強制移住)(筑摩選書)

解答

問一

(1)ーエ (2)ーア (3)ーオ

問二

エ

問三 イ

問四 オ

問五 エ

問六 エ

問七 オ

問八 イ

問九 Iーク IIーエ IIIーイ

問十 ア

問十一 オ

問二 「シルダの住民」の話は実話ではない。自分たちの愚かな行為に誰一人気づかない状況を戒めるための寓話であつて、実際にナチ占領下で生きたとは説明されていない。よつて、ア・ウは誤り。イは後半「愚かな理想主義を、未だ克服することができない」が不適。「理想主義」そのものが「愚か」のではなく、「理想」を掲げながら実は「愚か」なことが問題である。オは前半「高度な科学技術を導入して理想を実現しようとした現代世界の人びとの愚かさ」が不適。「高度な科学技術」そのものは「愚か」ではない。むしろ「文明の恵み」や「それなりの理想や福祉や繁栄」につながっている（第二段落）。一方で「愚か」な営みが為されている、というのが正しい内容。

問三 「目立つ強制移住」は、「古典的」、「暴力的」で「物理的」、「局部的」なものであり、わかりやすい「大権力」によつて引き起こされるものである。一方で「もっと怖ろしい強制移住」とは、「微視的権力」によつて進行する「地球規模」のものであり、目に見えにくい。二者の対比を混同しないように選択肢を読めば正しい解答が得られる。アは「大がかりで一過的な強制移住」が誤り。ウは「物理的強制移動に気づくことができなくなつてしまふ」が誤り。エは「暴力的で傲慢な新しい強制移動」が誤り。オは「新しい形の強制移動が行われつつある」という周知の事実」が誤り。

問四 「今ここ」は目の前に局在的かつ物理的に存在する現実世界を指す。一方「いつかどこか」は、「ヴァーチャル情報世界」、あるいは「成果追求競争」に必要な未来の計画、期待や不安、または過去を指す。現代社会において人びとは「今ここではない（いつかどこか）」を第一次的な関心の的とする超越的生活形式のなかで生きる」ようになっていく。アの「情報機器の氾濫」と「成果追求競争」は因果関係ではない。「あるいは」と並列であれば適切。イの「期待を不安に置き換える」やウの「強制的な移動」は変化の内容が誤っている。エは「未来の時間を消費し尽くす」が誤り。存在していない未来の時間は消費できない。未来のことを考えて今の時間を消費するという内容ならば適切。

問五 「生の純粹形」とは「生存する場所」「リアルな現在時」につなぎとめられて生きることを意味する。しかし、現代

ではいつのまにか「生の純粹形」を生きず、「超越的生活形式のなかで生きる」ようになっていく。アは「未来や先行きへの不安」に限定していることや、「疲れ」による「情熱」不足として説明している点が誤り。イは「しなければならぬ」という考えが「慣行」、つまり習慣として行い意にそぐわない。ウは「目に見えない強制執行を意識するあまり」が不適。意識しない間にいつのまにか「慣行」となっている。オは「〈今ここ〉」に意識の……重要視されるようになった」が誤り。

問六 「近さの世界」は本来、身近でリアルな実感を伴う世界である。ヴァーチャルで実感のない世界は遠いはずだが、現代の人びとはヴァーチャルのほうへ「没入」しており、リアルへの「帰属」意識が「希薄」になっている。とはいえ、「近さの世界」は『立場』を失っている」のであって、消えてなくなったわけではないので、ア「取って代わられている」、イ「吸収され」は誤り。ウ「現代世界の先行きへの不安」、オ「競争社会の尺度から判断」は、それだけが原因ではなく、原因の一端であるので不適。エが「リアル・ワールド」と「ヴァーチャル・ワールド」の関係を適切に説明している。

問七 傍線部直前に「この時代は、明日を思いわずらう度合いが極端にすぎる」「『この日』を亡失する瞬間抹消の度合いが激しすぎる」とある。つまり、目の前にない未来や架空のことばかり考えるよう、見えない何かに強制されているということ。アは「歴史的な病」が誤り。「思いわずらう」は悩む意味であり、病を「わずらう」のではない。イは「未来への不安を打ち消そうとして」「逃避する」が誤り。問六でも述べたように、未来への思いは「不安」だけではない。ウは「時間をもつことが難しくなってしまう」が誤り。物理的に忙しくなったのではなく、気持ちの上で「なにかに追い立てられ」（空欄Ⅲの次段落）て、リアルへの帰属が希薄になっているのである。エは「超越的な時空間に安らぎを求める」が誤り。

問八 問二の解説にもあるように、「シルダの住民」はナチ政権下の実話ではなく寓話なので、ア・ウは誤り。また、ア

は情報機器によるヴァーチャル世界の拡大と、成果追求競争の問題が混同されている点も不適。ウは「情報機器の発展」を「古典的な強制移住」に関心を向ける理由としたり、「競争から取り残される恐怖」と述べたりしている点も不適。エ・オは「シルダの住民」の扱いは適切だが、エの「〈今ここ〉」という本来の居場所がもはやどこにもない」、オの「意識」と「生身」をそれぞれ「ヴァーチャル」と「リアル」に分けて「矛盾」と表現している点がそれぞれ誤り。

問十 問三の解説参照。「物理的強制移動」と「新しい強制移動」の対比を踏まえて解答すればよい。それぞれ、イは「正義や理想の名目で」、ウは「大権力に注目させることで」、エは「強制移動が完遂され」、オは「目に見えない形で権力の行使によって物理的強制移動を試みる」が誤り。

問十一 「成果追求競争」の時代には、目の前の「〈今ここ〉」との結びつきが希薄になり、未来への期待や不安という「〈いつかどこか〉」に捉われてしまう。アは「局所的時空である〈いつかどこか〉」が誤り。局所的なのは「〈今ここ〉」のほうである。イは「リアルとヴァーチャルとの二つの次元に生きなければならなくなって」が誤り。「リアル」は希薄になっている。ウは「身近な人と愉快に暮らす喜びが忘れ去られてしまっている」が誤り。家族と過ごす時間こそ幸せだということは、「わかっている」と本文で述べられている。エは「成果追求競争のむなしさに気が付かなくなってしまうっている」が誤り。「他人との競争に参加している暇なんか、本当はないこと」も、「わかっている」と述べられている。

問十二 アは「現代世界の人びとが実は封建的迷妄から脱し切れていないから」が誤り。イは「リアル・ワールドの『遠さ』が明らかになった」が誤り。遠く感じられるようにはなったが、「明らかになった」わけではない。エは、「人びとは〈今ここ〉に佇み生きることが拒絶」が誤り。人びとが拒絶しているのではなく、目に見えない「強力なパワー」、すなわち「微視的権力」が拒絶しているのである。オは「ナチ政権下のドイツ国民への批判」が誤り。寓話として当てはまる一例ではあるが、この本文の主張にも当てはまるように、愚かな行為に誰も気づかないことの戒めと

して広く用いられる。

2

出典

矢野智司・佐々木美砂『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか 空間の絵本学』（第四章 動物たちが積み重なり合ったり呑み込まれたり——均衡回復の絵本体験）（勁草書房）

解答

問一

(1)―エ (2)―エ (3)―オ (4)―オ

問二

エ

問三

イ

問四

エ

問五

ウ・カ

解説

問二 「このような繰り返しによるリズム」については二つ前の段落で説明されている。「絵本作家は、同一性と差異の反復によって、絵本特有のリズムを生みだそうとする」とある。「同一性」とは「繰り返しされるプロセス」が同一だということであり、「差異」とは、繰り返しされる場面ごとに「動物の体の大小や言葉の少しの変化」があるということである。この「同一性と差異の反復」を「繰り返しされるプロセスには同一性がある」「イラストレーションや台詞などの言葉には変化があり、差異を含んだ反復がある」と正しく説明しているエが正解。

問三 傍線部は、積みあがりや入り込みの「集合体が臨界点にまで達した」後に起こる「崩壊」の瞬間を意味している。さらにその後「物語が開始されたところに立ち帰」って結末を迎えるというのが絵本の一連の流れ。アやウは「崩壊」の前であり、エは崩壊の後の結末を指しているため誤り。オは「崩壊」が開始に立ち帰らず「全く異なる場面」へとつながってしまうため誤り。

問四

傍線部「ここ」は直前の「絵本のなかの高く積みあがった動物の塔が、一瞬のうちに崩れるのを見るとき」のよう

解答

問一 ウ

問二 イ

問三 (b)―イ (c)―オ

問四 ア

問五 ウ

問六 イ

問七 イ

問八 (一)―オ (三)―ア (四)―ウ

な「崩壊」を指している。また、「溶解」は本文中で「自己と世界とを隔てる境界が溶解」（第九段落）、「主体が体験のうちに溶解」「客体との距離がなくなり」（第十一段落）などと言い換えられている。つまり、絵本を読み、積みあがりや入り込みの形で起こる反復の果てに最終的に崩壊するのを目にすると、自他の境界を忘れて没入する体験ができる」と述べている。アは「絵本世界」と「現実世界」の溶解となっており、誤り。イは「連続と非連続との繰り返し」が誤り。冒頭で、「連続性」は絵本よりも小説や漫画の特徴とされている。ウは絵本世界から離れて「遊び」全般への言及になってしまっているため不適。オは「秩序」と「空想」の溶解となっており、誤り。

問五 筆者は絵本の魅力や喜びを、反復によるリズムと崩壊の体験にあると述べている。アやエは絵本の魅力の内容が誤っている。イは「リズムの心地よさ」が絵本のことだと述べられていないため不適。オは絵本の楽しさに崩壊が含まれていないため不適。

問九 (ニ) 1ーイ 2ーカ 3ーエ (五) 1ーオ 2ーオ 3ーア

問十 イ

問十一 ア

問十二 エ

解説

問一 (1)は尊敬語であるので、主語を敬う。「渡り」の主語はリード文及び、本文一行目より男君である。

(2)は尊敬語であるので、主語を敬う。男君がいらっしゃるにつけても耐えがたく悲しく思うのは、大臣である。

(3)は補助動詞であるので、謙讓語と判断でき、目的語を敬っている。人々が「めづらしう見」ているのは、大殿を訪問している男君である。

(4)は謙讓語であるので、目的語を敬う。「宮の御消息にて」とあるので、宮が挨拶している男君を敬っている。

問二 傍線部は「連用形＋て」で直後につながっており、主語は直後と同じである。直後は「以前よりいっそう美しく見えなさる」の意であり、男君が主語である。娘を亡くした悲しみに暮れている大臣は主語として不適である。次に、傍線部の前の「御年の加はる故にや」の部分が挿入句であり、傍線部およびその直後の事情や理由を作者が推測している部分であるので、傍線部は「年齢が加わった結果」起きることであると判断できる。

問三 基本的な古文単語の意味が問われている。

(b) 「こよなう」は、形容詞「こよなし」の連用形ウ音便であり、「この上ない、格別すぐれている、格別劣っている」の意である。「およすけ」は、動詞「およすく」の連用形であり、「成長する、大人びる」の意である。

(c) 「さうざうしけれ」は、形容詞「さうざうし」の已然形であり、「もの足りない、もの寂しい」の意である。

問四 傍線部の「たまへ」は連用形であるので、下二段活用であると判断できる。下二段活用の「たまふ」は、主に会話文・手紙文で用いられ、謙讓語に分類され、主語は一人称である。そして、複合動詞の間に入り込むという性質もあ

る。ここでも「思ひ忍ぶ」という複合動詞の間に入り込んでいる。「忍ぶ」には、人目を避ける、耐えるの意があるが、「思ひ忍ぶ」は、氣持ちを我慢するの意であるので、アが正解である。

問五

宮から源氏への発言である。まず傍線部の後を確認すると、「奉れたまへり」とあるが、この部分は、源氏に御装束を差し上げなさるの意である。傍線部(f)でその装束に男君は着替えている。次に傍線部の前を確認すると、宮はその装束について、娘を亡くした悲しみの涙で目がよく見えず、色合いが良くないと男君に思われるだろうと思うと話している。傍線部は、今日だけは粗末な姿になりなさってくださいの意であるが、実際に宮が準備した装束は「色も織りざまも世の常ならず心ことなる」ものなので、謙遜した表現であることがわかる。

問六

係助詞「や」には疑問と反語の意味があるが、「やは」という形の「や」は反語の可能性が高い。娘を亡くした悲しみに暮れる宮が準備してくれた衣装は非常に立派なものであった。それに着替える時の気持ちが「かひなくやは」なので、宮が準備してくれた好意を無駄にしてよからうか、いやよくないの意である。直後の波線部(Y)の心情もヒントになる。

問七

「あまた年……」の歌は、前の「参りはべりつれど」で謙讓語が使われていることから「男君」が詠んだ歌である。またその返歌が「新しき……」の歌なので、こちらは「宮」が詠んだ歌である。「あまた年……」の歌の「色ごろもきては涙ぞふる心地する」の部分は、美しい晴れ着も着てみると、涙があふれる気がしますの意であるが、直後の「えこそ思ひ……しづめね」の部分から「晴らすことのできない、妻を亡くした悲しみの涙」であることがわかる。一方、「新しき……」の歌の「ふるものはふりぬる人の涙なりけり」の部分は、降ってくるのは年老いた私の涙であることよの意である。上二段活用の動詞「古る」がポイントである。

問八

(一)「にや」は直後に「あらむ」が省略されている表現で、であるだろうかという訳になる。下に存在の動詞があり、「で」と訳す「に」は断定の助動詞「なり」の連用形である。

(三)「ぬ」という形になる助動詞は、打消の助動詞の連体形か、完了・強意の助動詞「ぬ」の終止形であるが、直前

の「並ば」がバ行四段活用の未然形であることから打消の助動詞と判断する。

(四) 連用形に接続する「にけり・にき・にたり・にけむ」の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形である。

問九

(二) 「おはする」は、覚えておくべきサ行変格活用動詞「おはす」の連体形である。

(五) 「しづめ」は、後に「ず・ない」をつけて活用の種類を判断すると、マ行下二段活用とわかる。「しづめ」という形は未然形と連用形の可能性がある。点線部直後の「ね」は「こそ」の係り結びを受けているので已然形である。よって、「ね」は打消の助動詞「ず」である。「ず」は未然形に接続するので「しづめ」は未然形と判断する。

問十

波線部(X)「なかなか」は、かえって、中途半端にの意の副詞である。傍線部(d)「悲しみをこらえておりますが」との逆接関係を利用すると、波線部の後には「こらえられません」の意の文が省略されていることがわかる。

問十一

「ましかば…まし」という反実仮想の文であることを踏まえると、「来」の主語は実際に大殿を訪れた男君であると判断でき、男君の動作に尊敬語が用いられていないことから、波線部は男君の心内文であることがわかる。すると、尊敬語「思す」の主語は宮であることがわかる。

問十二

「おろかなる」は形容動詞「おろかなり」の連体形で、いい加減だ、並一通りだの意である。「べき」は当然の助動詞「べし」の連体形、「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形である。以上より、並一通りであるはずのことではないという直訳をとることができる。直前の歌のやりとりに詠みこまれた悲しみについての作者の言葉である。

4

出典

司馬遷『史記』〈越世家第十一〉

解答

問一

(X)ーイ (Y)ーエ (Z)ーオ

問二

イ

問三 イ
問四 ア
問五 イ
問六 ウ
問七 オ

解説

問一 (X) 「自」は返り点が付かない場合は「みづから」または「おのづから」と読む副詞である。返り点が付く場合は「より」と読み、起点を表す前置詞である。

(Y) 「以為」は、本来「以^テA為^スB」という形で、AをBと思う、みなす、するの意であるが、二文字を慣用的に「おもへラク」と読むこともある。

(Z) 「於是」は、「ここニおイテ」と読み、この時、こういうわけでの意である。読みがよく出題される。

問二 傍線部直前で、海辺で農業をしてゝとあり、傍線部直後で、まもなく数十万の財産を築いたとあるので、傍線部は、父子が苦労しながら力を合わせて財産を作ったの意である。アの「不正な産業を退けた」は直後の内容に直接つながらない。ウオの「人々に痛めつけられながらも」は、「身を苦しめ」の解釈が誤り。

問三 「致^シ千金」は、本文二行目「致^ス産数^ヲ十^ニ万」と対応しているので「千金を得ること」である。「至^ル卿相」は「以^テ為^ス相」に対応しているので「大臣や高位高官になること」である。

問四 范蠡は、巨万の富を得ることや高位高官になることを民衆の望みの極みだとしながらも、「久^{シク}受^{クル}尊^ハ名^ヲ、不^{ナリ}祥」の部分で、「長い間尊い名誉を受けることは不吉だ」と言って、大臣の職を辞し、散財した上で、斉を去っている。

問五 傍線部直前は「ここは天下の中心で交易の道が通じている」という内容であるので、傍線部は「生を為し以て富を

致すべし」と読み、〃生計を立てて富を築くことができる〃の意である。ア、「生以て富を為し」と読むと「生」が主語、「富」が目的語、「為」が動詞であるので、「生以為富」という語順になる。ウ、「富めり」の「り」は完了存続の助動詞であるが、傍線部の段階ではまだ富を築いていないので、不適。エ、「べくを以て」と読むのであれば、「以」は前置詞であるので、「以可」という語順になる。オ、「富みて以て致す」と読むのであれば、「富以致」という語順になる。

問六

ア、范蠡が大臣となったのは斉の国だけである。イ、「自分では働かずに」は不適。范蠡自身も働いている。ウ、本文二・三行目、最後の行から適当。エ、「農業や畜産の方法を人びとに教えた」、オ、「人に騙されて財産を失うことを恐れ」は本文に記述がない。

問七

二重傍線部の直前「耕畜、シ廢居」は、(注)から〃農耕や畜産を営み、貯えておき、値が上がったら売り〃の意であり、直後「ツ遂_二什一之利_一」は〃十分の一の利益を手に入れる〃の意であることから判断する。